

リスク社会時代の児童文学

第一回 リスク社会と存在論的不安

目黒 強



一 はじめに

現在、子どもたちは安全・安心・安定が期待できないリスク社会を生きている。ここでいう「リスク」とは、これまでの枠組み（近代科学・社会保障制度・国民国家等）では予測したり対処したりするのが困難なリスク（新型ウイルス・年金破綻・テロ等）を指す。

このようなリスク社会のもとでは、安定した生活が持続しないかも知れないという「存在論的不安」^②が惹起されやすい。だとすれば、子どもたちの現実と心性を描く現代児童文学にとって、リスク社会は避けては通ることができないアクチュアルなテーマであるといえよう。

そこで本連載では、同時代である二〇一〇年代に発表された日本の児童文学作品を取り上げ、現代の子どもたちの条件であるリスク社会とその心性である存在論的不安

の描かれ方を検討したいと考えた。今回は、濱野京子の作品を取り上げ、連載の輪郭を素描することにした。

二 原発のリスク

(一) リスク化する政府

『石を抱くエイリアン』（偕成社、二〇一四年）の主人公である市子は、将来の夢を抱くことができずにいる中三の子だ（国語辞典から「希望」が立項された箇所を切り取っている！）。ある日のこと、クラスで浮いている偉生という男の子から告白される。恋愛感情はなかったのだが、日本一の鉱物学者になるという夢を持ち、好きなものに真っ直ぐな偉生に惹かれ、友達以上恋人未満の関係が卒業まで続く。ところが、偉生が福島に帰省した日に東日本大震災が起こり、行方不明となる。

「あとがき」によれば、この作品は一九九五年生まれの子